

本田圭さん

<https://kei48.wordpress.com/>

同志社大学文学部文化史学科在学中、ユーラシア大陸を中心に世界 60 カ国ほどを旅する。卒業後、NHK 横浜放送局の記者として事件・政治・行政等を担当。英国イーストアングリア大学で紛争・ガバナンス・国際開発の修士号取得。在学中は移民支援の NGO に所属しながら、コソボでの難民支援団体や、国連（UNDP）駐日代表事務所でインターンシップに参加。駐パレスチナ日本国代表事務所で草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会プレスオペレーション部、外務省国際協力局中央アジア・コーカサス地方担当経済協力専門員等を経て、現在、在アラブ首長国連邦の機関にて調査・研究職に従事。



片岡： 今月のインタビューは本田圭さんです。本日はパレスチナ問題について、市井のパレスチナの若者の視点を中心に、お伺いしたいと思います。宜しくお願いします。

本田： 宜しくお願いします。私がパレスチナで勤務をしたのは 2015 年 12 月から 2018 年 5 月末までの約 2 年半でした。それまでにも中東には何度も足を運び、また数か月の滞在経験があったものの、年単位で暮らすのは初めてでした。パレスチナ、イスラエル、ゴラン高原というそれぞれに特徴あるメンタリティ、もしくはアイデンティティを持つ様々な人々が、対立要素を常に孕みながら、時には暴発させ、時には慎重に、また時には共存して日常生活を送るエリアを活動範囲としていましたが、この時に得た経験は、彼の地で暮らしたことの無い人に伝えるのはなんと難しく、また自分が接した人々のアイデンティティの強さや感情に影響されることも多くな



るため、あくまでも「私という人間から見た景色」ということで、偏ったものになってしまっているかもしれません。そして、その偏りは、それがいくら僅かなものであっても、常に他方から強い批判を浴びる可能性を含んでいるため、この地域のことについて語ることは難しいので避けていましたが、せっかくの機会ですので少しでも、お話できればと思います。

私が暮らしていたのは、パレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区でした。パレスチナ自治区は現在地理的にも政治的にも、また行政的にもヨルダン川西岸とガザ地区に分かれており夫々の事情や困難の種類も違います。私の体験はヨルダン川西岸内に限定されるので、その点ご了承ください。パレスチナでの暮らしの中で一番に思い出されるのは、日常生活を取り巻くあらゆる制限でした。最も目にする機会が多く、この私自身も困難に思ったのが「人・物の移動の自由」です。制限にも色々あるのですが、まずは西岸内のエリア分けについて説明します。パレスチナの中でも西岸地区は、A 地区（パレスチナ自治政府が治安・行政権所有）、B 地区（イスラエルが治安権・パレスチナが行政権）、C 地区（イスラエルが管理）の 3 地区に分けられていますが、このパレスチナ自治政府の権限を持つ A 地区は西岸の 20%以下、一方イスラエルが実質的に権限を持つ C 地区は 60%に及びます。地図を見ると、西岸地区の比較的大きな都市であるラマッラ、ベツレヘム、ナブルスの中心市街地などは A 地区、その他の村々は B 地区となっています。しかし、この B 地区は C 地区に囲まれており、イスラエルの力の強い地区の中にポツンと位置している状態で、村同士はイスラエルの入植地や道路で分断されています。

以下、参考。

パレスチナ西岸 総面積 約 5660 km²

オスロ合意 II において、西岸地区（東エルサレムを含まず）は A、B 及び C 地域に 3 区分され、C 地域は順次 PA 側に移管されることが規定されているものの、イスラエルは入植地や道路の建設を進めている。

A 地区 18% パレスチナ自治政府—治安・行政双方の権限（人口の多い市街地）

B 地区 21% パレスチナ自治政府—行政権限（主に点在するパレスチナの村）、イスラエル・パレスチナ自治政府双方が治安権限（但しイスラエルの権限が優越）

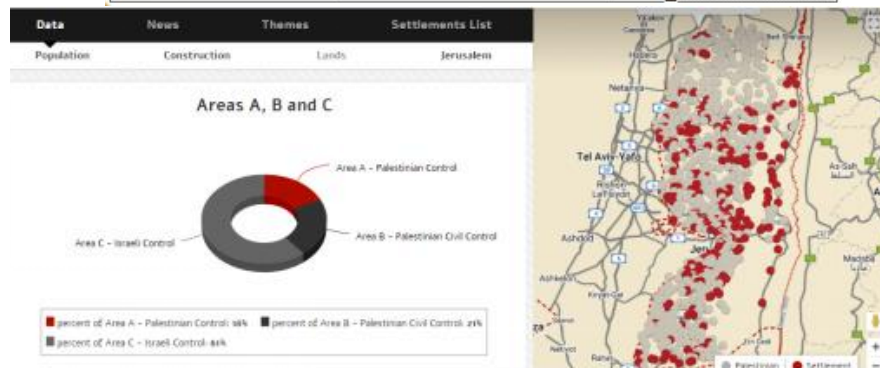
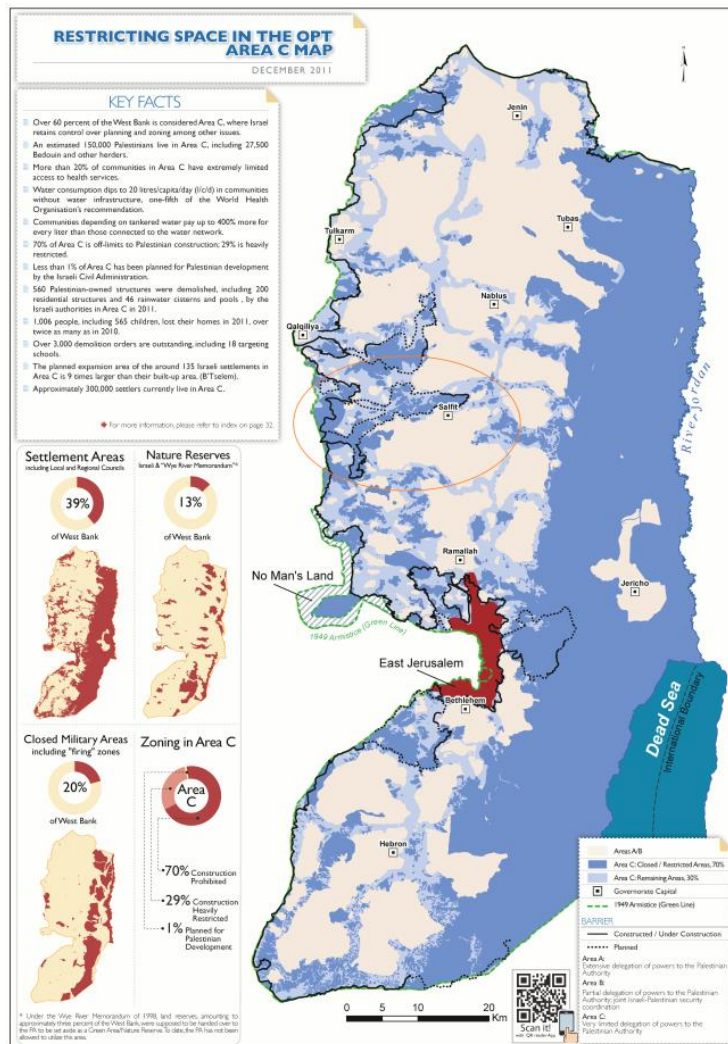
C 地区 61% イスラエル—治安・行政双方の権限（幹線道路、入植地周辺、砂漠、ヨルダン川溪谷沿いなど戦略的重要地域）

http://ccp-ngo.jp/about/salam/pdf/109_p6-8.pdf （参考）

<https://kei48.wordpress.com/2017/11/12/オリーブを摘みに、入植地と c 地区を抜けて。>

visiting-ol/

(参考)



<http://peacenow.org.il/en/settlements/settlement16-en>



このようにオスロ合意でエリア分けがされたものの、パレスチナ自治政府に治安・行政双方の権限があるとされる A 地区内ですらイスラエル兵がやって来て、パレスチナ人の逮捕、搜索を思うままに行っています。ラマッラに住んでいる時分に、大きな破裂音で目を覚ましたことがあります。それはパレスチナのメディア会社の事務所が、イスラエル兵によって破壊された時でした。また、難民キャンプや周辺の村々だけでなく、見なし首都とされているラマッラの中心部でも、イスラエル兵によるパレスチナ人逮捕とそれに伴う銃撃が発生することもしばしば。私がラマッラにいた時にも、衝突が発生し車のタイヤの陰に隠れているところを撃たれて亡くなった若い活動家の写真や絵が訪れるカフェなどに飾られていました。ラマッラ、もしくはパレスチナはとても小さな社会なので、多分私のラマッラに住むパレスチナ人の友人のう

ち少なくとも 10 人くらいは彼の近い友人だっただろうと想像できます。今思い出せば、直接の友人で逮捕されたことある人も数知れず、一人挟むと、撃たれたことのある人も数人いました。イスラエル兵の A 地区立ち入りに話を戻します。ある時、ラマッラ内のカタール基金の事務所がイスラエル兵によって搜索されたのですが、知り合いがその様子を録画した監視カメラのビデオを見ていたらしく、「パレスチナ警察も一緒に現場にいたけど、イスラエル兵の成すがままで情けなかった」と言っていま

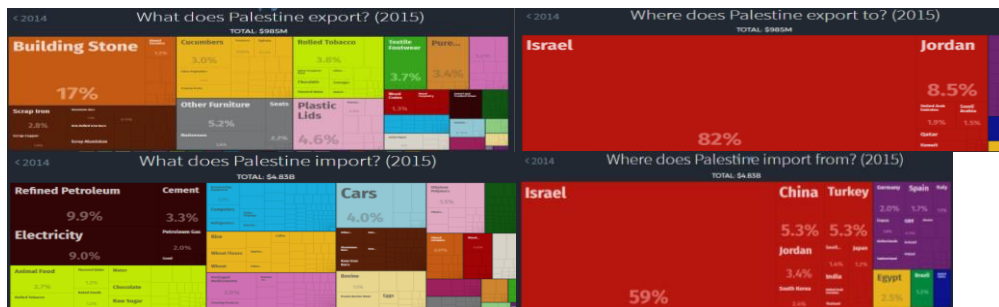


した。とは言え、カタールのハマス支援は、有名なところであり、対立するファタハ所属者が大半を占めるパレスチナ自治政府もカタールのハマス支援を好ましく思っていないでしょうから、イスラエルと共同で動いていた可能性も否定できません。

B 地区はパレスチナ自治政府が行政権限（主に点在するパレスチナの村）を持ち、双方が治安権限（但しイスラエルの権限が優越）を持つとされ、主に西岸地区に点在する村々がこの B 地区にあたります。しかし、村の土地の 90% が C 地区とされているところもあり、農業を主産業とする村人の農地は接収され、手の届かないところにあります。先祖から受け継ぎ栽培してきたオリーブの実が収穫されないまま生っては落ち、また作物が枯れて、死んでいくのをただ見ていることしかできません。これらの B 地区の村々は、他の西岸内のパレスチナの村と村との間を縦横無尽に走るイスラエル管理の道路によって分断されています。村の入口付近にイスラエルによる封鎖用のゲートが設置されており、頻繁に封鎖されます。そして、近くにはイスラエル兵の見張り台があります。私がとても仲良くしていたパレスチナ人のうちの一人、ムハンマドはサルフィート県の B 地区の村に住んでいましたが、私がいたラマツラに遊びに来ていた時に、村の入口のゲートが封鎖され、帰れなくなったこともありました。こういったことは、まま起こります。かく言う私自身も、西岸を出てイスラエル側に行っていたところ、西岸に戻るチェックポイントが閉まっており、帰れないことも一回や二回ではありませんでした。チェックポイントでは、イスラエル兵に通してもらえず引き返したり、高圧的に接されたり、身分証を取り上げられ待たされたり、また愛想よく接されたり、イスラエル兵とパレスチナ人の衝突中に催涙ガスや燃やされているタイヤの煙がその場に満ち、また石が道路に敷き詰められている中、催涙弾に泣かされ、強い刺激臭に耐えながら、パレスチナ側に通してもらえるよう、石を投げているパレスチナ人に頼んだり、話が分かりそうなイスラエル兵に突破できそうなタイミング（つまりイスラエル兵が発砲しない時）を目で指示してもらったり、どうにかパレスチナ側に戻ったり、頑張っても戻れずイスラエル側に引き返したり、、と様々な思い出があります。一度、まだパレスチナに来たばかり、また日本でも運転したことのなかった私がパレスチナで運転をはじめ、道も分からない時に、難民キャンプに迷い込んでしまった時がありました。拓けた場所で、左側にイスラエル兵やプレスが、右側は丘のようになっていました。ところが、私が進んでいた道をイスラエル兵が塞いでおり、向こう見ずで、感覚が狂っていた私は、左にいた兵士のことなど気にせず、「押したら通してもらえるかも」、と交渉したのですが、なしのつぶて。すると、左側で発砲音が。音のした方向を見ると、イスラエル兵が私の頭部のやや上方、つまり私の右手側の空間をみていました。その視線の先をみると、すぐ右わきにあった小高い丘上部から 30 人ほどの少年青年がすごい勢いで石を投げながら駆け下

りてきていました。ようやく状況を理解した私は、心の中で「I see」などと思い、石を車に浴びながら急いでUターンしましたが、パレスチナ人がイスラエル兵の車両を防ぐために満ちに敷いた石に引っ掛かり動けなくなりました。これら道に並べられる石は、絶妙な大きさで、踏んで乗り越えられそうな感じもするのですが、ちょうど車に引っ掛かる大きさなのです。そんなことはどうでもいいのですが、石にひっかかったこのどうしようもない外国人の私に気づいた同様にUターンして逃げようとしていたバスの運転手さんなどが、わざわざ止まってくれ、助けてくれました。この時に限りませんが、自分のせいで自分が傷つくのは自業自得なのでよいのですが、自分の向こう見ずさが、私を助けてくれようとした人まで危険に晒すことになるので、やはり、この件については反省しています。

このように容易に交通が封鎖されるパレスチナですが、輸出入にも制限もあり、産業が発達しにくく、多くの失業人口を抱えています。生活をするためにイスラエルで働くことやヘブライ語を学ぶ人がいても、パレスチナ人は「生活しなければならないので仕方ない」と考えている節があります。以前、パレスチナで実施していた案件について、日本の大学で報告させて頂く機会があり、パレスチナとイスラエルの輸出入関係についてのデータを載せようと調べたことがあったのですが、その数字を見て愕然としました。パレスチナは、エネルギーの大半をイスラエルに依存しており（そういう仕組みになってしまっています）、またパレスチナの輸出品として大きな割合を占めている石材の輸出先は80%イスラエルだったのです。もちろんなんとなくわかってはいたのですが、数字で見ると、その圧倒的な割合になんというか絶望感が沸き上がってきました。また皮肉なことに、この石材には入植地の建設にも使われています。労働者もパレスチナ人、アラブ人です。壁の建設もそうだったのでしょうか。生活がある彼らはどういう気持ちでその建設を行ったのでしょうか。パレスチナでは見ること聞くことの背景を探れば探るほど、どうしようもないもどかしさを感じます。



The Observatory of Economic Complexity

エネルギー依存の他にも水の問題もあります。「水戦争」という言葉がありますが、中東において水の問題は死活問題です。イスラエルは、ゴラン高原、ヨルダン川流

域、死海周辺含め、この地域の水資源へのアクセスは可能な限り確保している他、海水の淡水化も行っています。パレスチナで採取された水はイスラエルへ、そして入植者へと運ばれ、パレスチナ人には十分な水が回ってきません。比較的豊かなラマッラで水が出ない、という経験を私はほとんどしませんでした。村落部の夏は悲惨です。学校でもトイレの水も飲み水も足りないため、早く家に帰したり、水の持参を呼びかけます。週1しか水がこないところもあります。さらに、水が来ても、老朽化した水道管を通して水がくるので、水質も悪く、漏水率もとても高いです。私たちはお金のない村の水道管改修案件などを積極的にやっていましたが、大体30-45%ほどの漏水率でした。その高い漏水率に目を疑い、何度も確認しました。水はパレスチナの水源地からイスラエルに運ばれ、イスラエルがパレスチナ政府に売って、それがパレスチナ人に分配されます。「自分たちの水なのに」とパレスチナ人はいいいます。降水量も年々減っていく中、農業を主産業とするパレスチナ人はどうすればよいのでしょうか。

C地区は順次パレスチナ自治政府に移管されるという約束ですが、イスラエルは、そのC地区内にて、国際法上違法とされている入植地の建設を行っており、報道や現地NGOによりますと入植地、またそれに類するものは東エルサレムを除いても西岸内で合計約200に及び、そこで入植者の生活が営まれているということです。このため「現実的に、土地の移管は難しい」と考える人も多いそうです。ちなみに、私の仕事はパレスチナ自治区内のNGOや行政と協力して、現地の人の生活を支えるための案件を実施することを主な目的としていましたが、C地区での案件形成には至りませんでした。C地区は、最も案件形成の需要が高いことが多い地域なのですが、イスラエルから案件実施の許可が必要となるものの、許可をもらえない可能性高いし、許可を得ないでやると壊されるからです。ちなみにEUは果敢にもC地区で案件を積極的に行い、壊されては行い、を繰り返している、敢えて壊される案件を増やすことで、イスラエルの対応を非難するための証拠を増やそうとしているようにも見えました。各国の支援の方針の違いも見られてなかなか面白いです。例えば、USAID（アメリカ合衆国国際開発庁）は、道路改修や建設支援、イタリアは文化財修復、日本は水道電気、学校建設などのインフラといったところでしょうか。

これまでお話したことからも分かるように、パレスチナのヨルダン川西岸は、切れ切れになっており、そのバラバラの村に行くためにはイスラエルが管理する道路を通り、また入植地を横目に見ながら、むしろ入植者や兵士を前後左右に見ながら移動す



るしかありません。

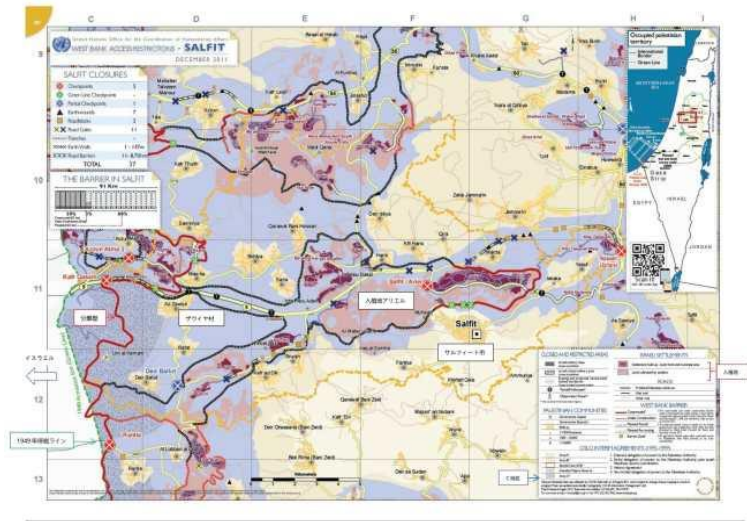
友人ムハンマドの村がある地域は、サルファイト県というパレスチナの中でも水源の豊富なところで、「オリーブの首都」とも呼ばれるほど、オリーブ栽培が盛んな場所です。一方この地域は 1949 年停戦ライン（通称グリーンライン）を境界としてイスラエルと接しており、あらゆる意味で戦略的にも重要な場所です。その小高いパレスチナの丘は、平地のテルアビブ周辺にある空港、地中海まで見渡せる立地であるためイスラエル人は「イスラエルのバルコニー」と見なしており、その水資源からもイスラエル政府のパレスチナ西岸における戦略的土地政策、入植地建設主要対象地域となっています。そのため、多くの入植地が建設され、ついにはパレスチナ人の村の数を越えてしまいました。

彼や彼の家族の「パレスチナの農村に住む人々」然とした生活ぶりに、親しみを感じ、また色々な地元の話を聞ける他、入植地に囲まれた地域最前線として、聞くべきことも多かったので、よく訪ねていき、一緒にお茶をしたり、オリーブ摘みをしたり、周辺を散策したりしていました。

前述のとおり「オリーブの首都」と呼ばれるその地域に代々暮らす彼らのオリーブ畑には「ローマ時代のオリーブ」と呼ばれる巨木が沢山あり、ビザンチン時代の教会やマムルーク時代の建物とみられる遺跡などが散見され、また様々な遺物が出てきます。私が見せてもらったのは、フクロウのモチーフが刻んであるコインだったのですが、後から調べたところ、古代ギリシャの



コインでした（真偽不明）。話は逸れましたが、この歴史ある村は、同時に第一次中東戦争後の停戦ラインであるグリーンラインのすぐそばにあります。遺跡に紛れて、戦争中に使われていたヨルダン軍の地下壕跡が残っており、その場所からはテルアビブの街並みやキラキラと輝く地中海を見



ることができます。彼が祖母から聞いたところによると、昔、祖母はその父と共にロバにオリーブ油やオリーブの荷を持たせ、現在のテルアビブの隣にある海岸の町ジャッファまで売りに行っていたそうです。交通が発展し始めてからは、ロバでオリーブの実を運搬することはなくなったそうですが、現在でも直線でいくと車ですぐの距離。しかし、パレスチナ人は昔のように、オリーブ畑の先に見える地中海に行くことは簡単にはできません。見えるのに、音は聞こえるのに、行けていたのに、その海の煌めきを見ることができても、その輝きを掴むことはおろか触れることもできません。私は一度、パレスチナ人を連れて、イスラエルの海に行ったのですが、その30歳近くになる友人らは「はじめて海で泳ぐ」と言って海に入っていました。その後ろ姿は、次から次に押し寄せてくる波に戸惑いながら、それでも、その塩水の波の応酬に感動しているようにも見えました。これはパレスチナだけで感じたことではないのですが、私は学生の頃から色々と旅をしており、その中で、国籍による機会の制限・無制限、私は日本の国籍を持っているという観点から「持てる者」であること、しかし私と一緒に食べ、話し、遊んでいる友人らの機会が制限され、また未来も制限されるという現実遭遇する機会が多々ありました。私が1回軽く挑戦したら、5秒でできることが、その友人たちにとっては、100回挑戦しても無理かもしれないし、100年経っても無理かもしれないことが現実にあるのです。私は比較的割り切っていると自分では思っているものの、不公平感を感じざるを得ないですし、大変もどかしい気持ちになります。またその現実を飲み込んでいる、飲み込まざるを得ない友人らの姿を見るのも大変心苦しいです。

パレスチナでは、海へのアクセスがないだけでなく、移動の制限は色々な形態、広範囲に及びます。例えを出して言うと、ムスリムにとっても聖地であるエルサレム

は、パレスチナのみなし首都ラマッラから早ければ車で 15 分くらいで着く場所にあるものの、行くのにも、イスラエルから許可を受けて、チェックポイントを通って向かうしかなく、デッドロック状態です。この許可書は病気など特別な理由があっても中々もらえないのが現状です。しかし、例えば聖地エルサレムへの訪問需要が高まるラマダン月の金曜日には、女性限定で許可がでたり、高齢者もイスラエルに対して危険度が低いとみなされているためかパレスチナ人の中でも許可が比較的出やすい方かもしれませんが、すべては運です。その決定が急に覆ることもあります。中でも「テロリスト」とみなされる可能性の高い特に若い男性に対しては許可が下りにくいというのが現状です。しかし、中には壁を越えて、イスラエル側に行って、働いたり遊んでくる人もいます。イスラエル側も不法ながら安い労働力として使える壁を越えてくるパレスチナ人の存在は認識しているようです。『オマルの壁』という分離壁やパレスチナと取り巻く現状を青年らの視点で描いた映画をパレスチナで見たのですが、ちょうどその数日前に、友人から壁を越えてイスラエル側に行った時の話を聞いていたので、映画の舞台はまさに自分が住んでいる状況と同じだと強く思いました。例えば、友人の兄はそうした密入国の手伝いをして、その手数料で生計を立てていました。双眼鏡で眺めながら、兵士が来ないか確認し、兵士が近くなったら、それを電話を通じて走っているパレスチナ人に伝えるのです。ちなみに、友人はパレスチナ最高峰の大学を出て英語流暢に話し、以前は研究機関で働いていましたが、私が知り合ったときには無職の状態でした。彼には他に数人の兄弟がいますが、誰も安定した職がなく、働き手は高齢の父親がイスラエルで日雇いの仕事をしているのと、密入国の手数料（コミッション）で収入を得ている兄のみです。

片岡： 本田さんが個人的に感じた困難さについてもう少しお聞かせください。

本田： パレスチナ人がぶち当たる困難とは比べものになりませんが、移動の制限とその心理的影響という点で振り返ると、仕事やラマッラから出て遊びに行く際に、国籍や許可所持の有無を以てして一緒に行動する人を、また行先を選ばなければならなかったことです。私は外国人で、かつ大使館で働いていたので対イスラエルとの関係では一定の保護下にあり、同地域の中では他の人に比べて自由がある方でした。しかしそれは同時に、他の友人や同僚は私より行使できる自由が少ないということでした。私は一緒に出掛ける友人の背景や国籍、身分によって、イスラエルからの通行許可書の所持の有無によって、行く先を決めたりしなければならなかったのです。例えば、友人 A は外国人で、且つ大使館で働いているため、どこのチェックポイントからでも抜けられ（何れにせよチェックポイントは通過しなければならない）一緒にテルアビブまで遊びに行けるし、もし何かがあっても一緒に切り抜けられる。友人 B はいい外国人だが、一般人なのでイスラエル兵と対した時に、態度に気を付けなければならないの

で、私が主導して状況に合わせて行動する。パレスチナ人の友人 C とは一番仲がいいが、許可書を持っていないので、車で 20 分の距離にあるエルサレムにも一緒に行けない。しかし、西岸内の他の村には行けるので、一緒に遊びに行くが、イスラエル兵に止められた時には、私に対応する。パレスチナ人の友人 D はジャーナリストで、イスラエルから警告が出ているので、ラマッラの外にすら一緒に行けない、など。この「私に対応」というのも、今思い返すと、中々ストレスがあったのです。それは、対応を一步間違うと、私は撃たれないまでも友人が撃たれるとか、友人が拘束される可能性もあり、且つ友人の怒りの感情もできるだけ抑えて、両手にパレスチナ人、イスラエル兵という発火可能性のある筒に火をつけないように、その場を取めなければならず、また私自身もマークされないようにしなければならないということを考えながら、大きな銃を持つ若者数名とやり取りしなければならなかったからです。もちろん 95% の確率で撃たれることはないと分かっているのですが、私たちでなくとも、周りの状況により何がいつどこで着火点になるかわかりません。イスラエル兵も様々ですが、恫喝されたり、車両を調べられたりすることもあり、加えて入植者に道を塞がれ車を蹴られたことや、身分証を取られ、その先起こることが不透明なまま、体も大人になり切っていない若い兵士に威圧的に接され、様子を伺いながら対応せざるを得なかったこと、パレスチナ人によりイスラエル兵 3 人が死傷した後の緊張状態の中、その場所を車で抜けたこと、「Hi」と気安く声をかけられたのに無視したために、車で行く手を塞がれ、マシンガンのようなものを持ち出された経験があること、またイスラエル兵が私のすぐ隣で発砲した経験もあることから、私はいつも何となく、銃弾が飛んでくることを想定して気持ちの準備をしていました。しかし、自分でそのことにストレスを感じていたと気づいたのは、パレスチナとイスラエルの外に出たあとでした。旅行でドイツに行ったとき、まず驚いたのが「警察がいない！兵士が町にいない！私、構えていない！」と思ったのです。ドイツには、以前も行ったのですが、パレスチナ滞在中に行くと、銃を抱えている治安機関を町で目にすることがない、もしくは攻撃姿勢ではない警察官しか目にしないことに驚いたという自分の状態によって、「パレスチナでは無意識にストレスを感じていたのかな」と気づいたという次第です。

片岡： 入植地については、いかがでしょう。

本田： パレスチナ全土で言えることですが、入植地の建設はどんどん進んでいます。特に先程から話に出てきているサルフィート県に絞って言うと、2010 年以降、県内における入植地の建設が急速に進んでおり、2002 年に比べると入植地の数は 400% 増となっていると現地メディアで報じられていました。そして年々増える入植地はついに県内のパレスチナ人の村 18 に対して、イスラエルの入植地が 24 と、入植地がパレスチ

ナの村の数を越えてしまったそうです（2018 年当時）。入植地に囲まれた村出身のニザールが「故郷の村に向かう度、景色が変わる。地図に載っていない入植地が沢山できている。地図の更新が追い付いていない」と諦めともとれる表情で語っていたことを思い出します。

経済的な優遇政策がとられている入植地には、経済的な理由で居住している人もいれば、過激なユダヤ復興主義思想のイスラエル人も住んでいて、入植地にはもれなく兵士も駐在しています。パレスチナの村と入植地は近接しているため入植者とパレスチナ村人の衝突も絶えません。衝突はあらゆる事象に起因します。

例えば、西岸地区の大きな都市ナブルス周辺の場合。バグダッドなどから、中東の主要都市につながり、アレppo、ダマスカス、ナザレからエルサレムというルートの間にあるナブルスは「小ダマスカス」とも呼ばれ、歴史的にパレスチナの中心都市でした。しかし、現在は文字通りに入植地に囲まれているため、入植者とイスラエル兵士、そしてパレスチナ人との間で衝突が発生することも多く、ラマツラからナブルスに向かう途中のチェックポイントでは投石、銃撃、刃物による殺傷含む様々な事案が発生します。また話はそれますが、このチェックポイントを通るたびに思い出すことがあります。友達のスマホにつないだ音楽を全開にして、パレスチナ人の友人をのせてパレスチナ風の運転をしていた時のことです。20 年物の車に乗って、当時はやっていた若者すぎるバカバカしさも纏う当時流行っていたノリのよい曲（デスパシート）をかけ、勢いよく運転していた車を怪しんだのか、兵士に停止するよう合図を送られました。「車で兵士に突っ込むつもり」がないことをアピールする運転で笑顔で近づきながら、音楽のボリュームを絞ろうと車の音量ノズルを回したのですが、音楽は友人のスマホにつながっていたため、こちらでは操作できないことに気づきました。大音量状態のまま、兵士の脇に車をつけ、私は「Hey！音楽とめて」と、既にイスラエル兵に「Hi」と言っている友人に言いましたが、彼女は音楽が大きすぎて、私の声に気が付かず。イスラエル兵の方も大音量の車を止めてみればヒジャーブ女子とアジア人女子が悪気もなさそうに乗っているので、おかしくなったようでした。その日はユダヤ教の休日だったので、駐在するイスラエル兵たちは、アラビア語を話す主にイスラエルのカラメル山周辺に住むドゥルーズ族でした。兵士は助手席に座る友人側にいたのですが、友人は兵士に対し、おどけた感じでナブルスに行く理由を「カナーフエ（ナブルスで有名なスウィーツ）を食べに行くの」と説明。兵士は「朝からカナーフエを食べに行くのか？」と質問を重ねてきましたが、友人は「Why not!？」という応対をし、兵士を笑わせていました。その後、友人は「帰り道に買って行ってあげようか、というところだったわ」と笑いながら言いました。そうやって、私たちは「楽しい会話」でその場を切り抜けました。彼女は先日も、ヨルダン国

境でイスラエル兵と対した際に、アメリカ帰りらしいイスラエル兵と楽しく会話をしたそうで、彼女がヨルダンで購入したスターバックスのドリンクとマフィンを持っているのを見て「ヨルダンにはスタバがあるの！？（イスラエルにはない。さらにイスラエルは地域の中での優越感というか西欧諸国に近いと思っているため、「ヨルダン」なんかにスタバがあるとは思っていなかったのでしょう）、君はなにが一番好き？僕はマフィンだよ！」というやり取りをしたということでした。彼女はここでもまた、マフィンを上げようかと思ったそうですが、毒入りを疑われたり、無用な問題を起こさないようにするため、渡さなかったといいます。彼女は、もちろんパレスチナの現状に憤りを感じ、多くの人に知ってもらおうと情報発信をし、国際開発関連の仕事をしています。こういった場をやり過ごすために、感じよく、敵意を見せないように接している側面もあるのですが、個々の兵士の態度にもよりますし、考え方にもあります。サルフィート県のムハンマドも、彼の家にイスラエル兵が入ってきた時に、そのうちの一人と英語で色々与会話したそうです。話を聞くに、相手も真摯というかムハンマドと真面目に会話をしていたようですが、上官に叱られ、会話を中断したとのことでした。こういう話を聞くと、パレスチナ・イスラエルの歴史と状況、そしてそのような敵対する環境の中育ってきた双方に住む若者のことについて思いを巡らせます。「もしかすると、何かのきっかけで対立が収束するかも」などと思うのですが、そういった思いは、現在の国際情勢やパレスチナ・イスラエルの政治を考慮すると難しくも感じ、またそういう希望を持つような気持ちは別の出来事により、すぐ打ち消されます。

ある日、ムハンマドと彼の家族と一緒に、散歩がてらオリーブ畑に行く道を歩いていた時のことです。イスラエルの入植地を横目に、春の陽気を感じながら花が咲き乱れる春の小道をぶらぶらしていたところ、向こうから10代前半くらいの少年が、自転車を押しながら歩いてきました。何か不自由がありそうな動きだったので、よく見ると、手と足から血が出ていました。私たち日本人だったらこの姿を見ると「転んだのかな」と普通思うのですが、私たちと一緒にいた3歳のパレスチナ人の子供が「兵士！」といったのです。そして、「イスラエル兵を撃たないと」と拙い子供言葉で続けました。傍にいたムハンマドが「Kei,今聞いた？この子はイスラエル兵の作業だと思ったんだよ」と言いました。その子供は、少年がイスラエル兵に暴力を振るわれ、怪我をしたのだと思ったのです。実際に聞いてみると、少年は自転車で転んだだけだったのですが、私はその子供の言葉を聞き、二重にも三重にも、あらゆる側面から恐ろしいと思うと同時に、これが世代を超えて引き継がれていくのかと絶望にも似た感覚をおぼえました。その子供は、ムハンマドの家に夜中にイスラエル兵が数名で押し入ってきた時に寝ていたところを叩き起こされた経験があります。また近くの村

人が殺されたり、道を封鎖されたり、衝突の際に様々な話を周りの大人たちの話が聞こえてくるのでしょうか。そして、この3歳の男の子も多分に漏れずあと数年すれば、友人らと共に投石に向かい、また周りの人を傷つけられたり失ったり、様々な体験をしていくことは、このパレスチナとイスラエル間の問題がある限り確実です。というのも、私が「外国人」として、また「大使館」で働いていた者として、パレスチナに住むあらゆる人より多くの「保護」があってもなお、暮らしていく中での制限にぶち当たりまくり、本当に嫌な思いをしたからです。しかし一方、この村にはイスラエルとパレスチナの境界線沿いの入植者が村はずれのパレスチナ人の車の修理屋さんに来ていたり、私を見かけたパレスチナの村人が「シャローム」とイスラエルのヘブライ語であいさつしてきたり、この家のお父さんがみんなで食卓を囲んでいるときにヘブライ語で「タイム」と言ったり、猫を入植地の名前を名付けたり、人々はそれ以外に手はないのか、暮らしてる状況をシニカルに表現する姿を目にしたこともあります。

衝突の話から、かなり脱線しましたが、サルフィート県やナブルス周辺は兵士と接する機会も多く、また、パレスチナ人が追い出された住居に住む入植者とパレスチナ人の住居が入り混じっているヘブロンでは衝突が多い印象があります。（ヘブロンについて書いた記事→ <https://wp.me/p86U3z-3A>）しかし、イスラエルは衝突が起きたら道路を止め、村の入口のゲートを閉めてしまうので、イスラエルが実質的に管理する道路で分断されている西岸に点在する各村々は、行き来ができなくなり、そうすると隣の村でも何が起こっているのか分からないため、村々が連携するなど散発的に起こる運動がまとまり「束」となることは難しくなります。ちなみに衝突は、デモ後に発生したり、チェックポイントで発生したり、パレスチナ人の住居取り壊し、逮捕の際など様々なケースを起因として発生しますが、パレスチナ人对イスラエル兵の他に、対入植者の場合もあります。このような衝突に巻き込まれるもしくは参加するパレスチナ人の青年らも銃撃を受けたりするのですが、その怪我人をパレスチナの救急部隊が救助しようとしても、イスラエル兵に阻まれることもあり、またイスラエルがその銃撃を受けた者、もしくは遺体を収容するケースも常にあります。その場合、遺体が家族の下に戻ってくるのは通常数週間～2月間後のことになります。一度、病院に収容されていた遺体を、パレスチナ人がかなり荒い方法で壁を跨いで引きずりながら移動させていた映像をみたことがあります。これはイスラエルに収容されたら、遺体に戻ってくるか否か分からないため、懸命に遺体を家族の下に戻そうとしていたのでしょうか。

このような日常の衝突、その他にもパレスチナが経験した二度の大規模な民衆蜂起「インティファダ（イスラエルによるパレスチナ軍事占領に対する民衆蜂起）」の

中でパレスチナは多くの、特に若者の命を失ってきています。イスラエルも同様です。イスラエルもインティファダの際に、街中でテロが発生し多くの人を亡くしています。その後も、パレスチナ人の比べると少なくはありますが、死者を出しています。パレスチナに滞在し、パレスチナ人と日常的に接する中で、私が出会ったどのパレスチナ人家族も肉親がイスラエル兵に殺された或いは殺されなくても、逮捕された、もしくは未だ牢獄ににいるという経験をしていました。というか、第一次インティファダ時に若者だった男性は、海外に出ていた人以外、ほぼ逮捕された経験があり、一度捕まることが普通だという感じでした。

私が一緒に仕事をしていた 40 代のパレスチナ人男性も、もちろん逮捕された経験があり、叔父を第一次インティファダで亡くし、24 歳だった一番下の弟も 2004 年の第二次インティファダで失っていました。2 人ともイスラエル兵に撃たれてなくなったそうで、彼の家にも戦闘服を着た 2 人の肖像画が飾られていました。そして彼



は、私と働いている時期に 1 年間で 3 人いる子供のうち（長男次男長女）2 人の息子が逮捕されてしまいました。10 代の次男がイスラエルに逮捕され、その数か月後に長男が家のドアをぶち破って入ってきたイスラエル兵に逮捕されました。罪状は知らされないまま捕まり、2 人は 1 年近くの牢獄に収監されていました。友人は、容疑に関し、次男にはイスラエルが設置したフェンスを友人らと一緒に切ったこと、長男は大学で政治的な発言をし、オピニオンリーダーになる可能性があったので扇動の罪で逮捕されたのだらうと言っていました。

10-30 代の友人らのソーシャルメディアページを見ていると、衝突や何かの理由でイスラエル兵に撃たれて死んだ彼らの友人の写真が、亡くなった経緯の説明、哀悼の言葉など共に投稿、拡散されているのを目にします。村の中や、特に難民キャンプではこれがポスターになったものが沢山掲げられています。若い男性の顔写真が多いのですが、中には子供が姿も見受けられます。

片岡： 衝突に発展する出来事に参加する人々はそれを通じて何を求めているのでしょうか？

本田： 政治的解決が必須で、イスラエルの圧倒的な力に向かい抵抗活動が延々と続いている一方、状況が全く改善しないどころか、悪化する状態の中、個人が命のリスクを負ってまで参加する意義は何なのか、と考えたことがあり、トランプ大統領のエルサレ

ムに関する発言後に、衝突現場に行って石を投げていた友達の話をしてくれた私の友人に「それで何が変わるのか」と尋ねてはいけない質問をしている気持ちはありつつも、問うてみました。友人は「君の言っている意味は分かる。でも、その前に君は1つ知っておかなきゃならない。数年前、彼はイスラエル兵に2発撃たれて、死にかけたんだ。そしてその影響で今も体に不自由を抱え、歩くのにも苦勞している。その場にいくことで、彼は何かが変わると信じているんだ。だから行かなきゃ、戦わなきゃいけないんだ、と信じているんだ」と。

片岡： イスラエル建国により、現在のイスラエル領内に居住するパレスチナ人もいるのでしょうか？

本田： パレスチナの土地にイスラエルが建国された1948年、その地に住んでいた70万人以上のパレスチナ人が家と故郷を失い、周辺国やパレスチナ西岸、ガザ地区に逃げるなど散り散りになりました。一方、経緯は夫々であれ現在のイスラエル領土内に暮らしているパレスチナ人もいます。イスラエルでは彼らのことをパレスチナ人とは呼ばず「アラブ系イスラエル人」としています。そして、1948年に建国されたイスラエルで生まれた彼らのアイデンティティも様々です。自分たちを「パレスチナ人」と強く認識し、パレスチナの独立のために力を注ぐ人もいますし、ヘブライ語を学び、ユダヤ人であれロシア人であれイスラエルに住む人々と接し、一緒に仕事をしていく中で、自分を「パレスチナ人」と認識しなくなっている世代も沢山いるように感じました。西岸やガザにすむパレスチナ人への共感性をそれなりに持っているものの、実質的に相対的強国であるイスラエルにいる彼らは、西岸やガザのパレスチナ人より遥かに自由を享受しており、西岸やガザのパレスチナ人に対して優越感を持っていたり、イスラエル政府の方針と同様の発言をしたりします。そんな中の一人の男性に「あなたはパレスチナ人というアイデンティティなの？それともイスラエル？」と聞いたことがありました。彼は虚を突かれたような顔をし、結局回答には至りませんでした。彼らが優越感を持とうとするのは、もしかすると自分たちがイスラエル国内で「2級市民」として扱われていると感じる場面が多いからかもしれません。

分断から70年以上が経った今、イスラエル国内に暮らす「パレスチナ人」とパレスチナ自治区の西岸・ガザ地区の人々の間の隔たり、そして分断から10年が経った同じパレスチナ自治区内の西岸地区とガザ地区の間の距離を果てしなく感じます。

ある一定の年齢層以上の人々に話を聞くと、イスラエル人でも「ラマッラに行ったことあるよ。友人もいた」「ガザに海が見えるいいシーフードレストランがあった」という人や、パレスチナ人でも「イスラエル人の友達なんか沢山いたよ」「『イスラエル人』全員が悪い人ではないことは分かっている」「昔はユダヤ人もムスリムのアラブ人も、クリスチャンもみんな仲良く暮らしていたんだ」という人もいます。しか

し、今、両国の若者と話していると、イスラエル人の中には報道やインテリファード中の記憶、そしてガザからのロケット弾などを通して知る「テロリスト」としてパレスチナ人を見、またパレスチナ人は自分たちの土地に入り、検問所で高圧的な態度をとり、友人や仲間を殺す「イスラエル兵」を通してイスラエル人を見ているのかもしれないと思います。過激な人を除き、双方とも、全員が悪い人であるとは思っていないというのは感じるのですが、もうお互いに傷が深すぎるのかもしれない。双方の移動もままならず、個人と個人の結びつきがなくなり、共感性も低くなり、相手の状態を心をもって想像することが難しくなる。それはイスラエル—パレスチナ間、イスラエル内のパレスチナ人—パレスチナ自治区内の人々との間、そしてパレスチナ自治区内の西岸地区—ガザ地区間、少しの距離がどんどん遠くなり、果てしない乖離になっていきます。心を通わせ合えない。これがじわじわと浸透する分断の恐ろしさです。

勿論、今はツイッター等 SNS もありますが、実際に足を運んで行くことが出来なくなります。それでも、他の村で死傷者が出たりするとニュースメディアに掲載され、SNS を通じて拡散し、運動も近隣に波及します。しかし、銃などの火器を持たないパレスチナ人にできることは、タイヤを燃やしたり、石を投げたりすることが主要な抵抗手段となります。心のインテグレーションができなくなっていると感じることがありました。ガザ地区で砲撃がおこなわれていても、西岸の他の村や地域で衝突が起こっていた時も、私はパレスチナの友人と西岸の中心都市のラマッラのカフェでいつも通りコーヒーを飲み、お喋りをしていました。周りも平常通りで、不思議な気持ちになりました。その気持ちを西岸のパレスチナ人にぶつけてみると「かわいそうだと思うけど、いつものことだから。私たちに何ができるのか」との回答でした。ガザの状況に心が痛まないわけではありません。しかし、自分たちの状況も苦しいなか、他の人々の苦難を「take」し「handle」することが出来ないのかもしれない、それが繰り返されているので、疲弊してしまい、自己の精神の安定のために、あまり心を入れすぎないようにしているのかもしれない。中には、村落で衝突が起こったり、イスラエル兵にパレスチナ人がナイフをもって向かっていく事件などが発生することを快く思わないパレスチナ人もいます。そういう出来事が起こるせいで、イスラエルの自分たちに対する締め付けが厳しくなるからだそうです。

片岡： 分断の定着は恐ろしいものですね。

本田： 私はパレスチナに数年いただけで、パレスチナの歴史、現状についても不勉強なので、自分では判断し難いのですが、パレスチナ政府について批判をするパレスチナ人も多くいます。汚職などについてもですが、イスラエルに加担しているだとか、パレスチナ人を抵抗に向かわせているだとか、色々です。それは、パレスチナの中でも、

パレスチナ政府がイスラエル政府との協力の中で、パレスチナ人の（対イスラエルもしくは対パレスチナ自治政府）の「反抗分子」を捕まえたり。インティファダの際には、パレスチナ自治政府もその動きを主導し、結果抵抗は長引き、ラマッラも爆撃され、戦車も入ってきて、町、インフラが破壊されました。同僚はインティファダのせいで、壁ができ、イスラエル側にも行けなくなり、どんどん自由が制限されていると言います。インティファダ時にはパレスチナ人の怒りは頂点に達し蜂起するのは必然だったのかもしれませんが。その後の生活は多くの面でより苦しくなったものの、その蜂起を「間違いだった」ということは個人的にはできません。やはり彼らも突破口を見つけるために命懸けで戦ったのですから。パレスチナ国内では西岸とガザ地区が物理的に、そして政治的にも分断されていますが、これは 2004 年のパレスチナ地方議会選挙、2006 年の評議会選挙でのイスラーム主義勢力ハマス勝利など、民主的である選挙でハマスが選ばれたものの、ハマスをテロリスト指定していた多くの西側諸国は資金援助を止めました。ガザはハマスが実行支配し、西岸は実質ファタハの支配の下で運営され、パレスチナの内部が分断されています。

またパレスチナはアメリカやヨーロッパ、湾岸諸国、日本などを支援者としていますが、同時にそれらの国はイスラエルとも関係を持っています。そして何より「主要国」はパレスチナを国家として承認していません。

更に、一時期問題解決への希望の光であったオスロ合意といった平和へのロードマップが履行されていない現状への諦めの気持ちも見受けられます。「オスロ合意で取り決めたのに話し合ったのに、まったく履行されていないどころか入植地は増える一方で、何もよくなっていない。イスラエルと話し合っただうなるんだ」という気持ちです。自分たちが選んだ人は国際社会に認められないし、国内を見てもどうしようもないし、政治家に対してどうしようもないという感情が広がっています。

片岡： イスラエルは、シリアのゴラン高原も占領していますが、違いはありますか、…。

本田： イスラエルはゴラン高原では全く違うアプローチをとっていますが、これはゴラン高原の人口規模と地域が小さいことも理由の一つだと思います。西岸、ガザそれぞれ 200 万人のパレスチナと、ゴラン高原の主な住人であるドゥルーズ族の人口約 2 万人の差、そして、ダマスカスからの近さ、…、イスラエルに実行支配された 1967 年以



降、ゴラン高原でもデモが活発になり逮捕者が多くでたそうで、当時のイスラエルにいる「エスニック・グループ」の中で人口に占める逮捕者の割合が、最も比率が高かったそうです。しかし、その中で命を失ったり、長い長い間刑務所の中で暮らすことになったり。抵抗をしている中で、シリア政府も声では応援するものの、本当に支援するつもりがあるとは思えず、争いの中で暮らすより、平和な暮らしの中で子供たちも育てていきたいという考えにシフトしていったそうです。2011年にシリア内戦が始まる前までは、ゴラン高原の若者たちもシリアの大学で勉強できていたのですが、内戦がはじまり、シリアへのアクセスが極めて限定されてしまいました。シリアで教育を受ける機会のない若者たちは、急速に「シリア」という国への帰属意識をなくしているそうです。彼らはイスラエルの大学に通い、ヘブライ語も話せます。イスラエル人の友人も多く、イスラエルからの観光客を受け入れています。またイスラエルは、教育を受けたい若者に奨学金提供の代わりに、イスラエルパスポート取得を条件にするなど、彼らが「イスラエル国籍をもつイスラエル人」とシフトしていくよう様々な策を講じています。イスラエルでパスポートをとれば、というよりパスポートさえ持てれば、イスラエルと国交を結んでいないアラブ諸国は別として、どこかの国にでも行けます。また奨学金をもらえたりします。

またゴラン高原の村々にはイスラエルが設置した役所があり、夫々代表「村長」がいるのですが、昨年になり、その村長を選ぶ選挙に投票するための投票用紙が届いたそうです。投票させて「ゴランの人々が選んだ村長」という事実を形成するためなので、ゴランの人々は平和裏にボイコットをしていました。人口が少ないこともあり、イスラエルとも実質的に関係を持ちながら生活するゴランの人々。彼らが直面する問題は、そのアイデンティティのよりどころです。シリア人としての認識もあるものの、年々その感覚は薄れ、イスラエルの国籍を取る人も徐々に増えています。昔はイスラエル国籍を取った人には村八分を行っていたそうですが、今はそれも緩めている



ようです。現状と可能性、利益、不利益を見定めつつゴランの人々がとってきた道。彼らはもちろんイスラエル国内、そしてパレスチナも自由に行き来できます。一方、「シリア人」としての意識を失いつつある人々もいます。ゴランの川に行ったのですが、その時に若者が「Welcome to „„Jordanian river!!!とちょっといい淀んでから言いました。これはパレスチナ人だったら必ず「パレスチナへようこそ」というでしょう。ゴランの人々は。「イスラエル北部」との教育をされています。しかし、その自分たちの土地がイスラエルの支配下にあることも知っている。「シリア」とも「イスラエル」とも言えず、ヨルダン川と河川名で答えたのでしょう。

私の友人のゴラン人俳優はトルコでの映画のオーディションの撮影があったのですが、結局、トラベルドキュメント（国籍の証明のない文書）しかなく参加できず、モロッコの映画祭に招待されても参加できませんでした。努力をして、チャンスを掴んでやっとなんかところでダメになります。そうした意味では、どちらの人たちも、努力をしても回復できないディスアドバンテージを背負っています。ゴラン高原の状況も特殊で、この話を始めると終わらなくなるので、また次の機会に…。

片岡： 分割統治の典型ですね。それではパレスチナに話を戻します。米国はパレスチナのドナーとして重要な国だと思いますが他の国については如何でしょうか？

本田： 1950、60年代は、アラブ諸国でアラブ社会主義が盛り上がりを見せており、1957年に設立したファタハも左派勢力として武装闘争を繰り広げていました。当初は中国、ソ連、共産国からの支援を受けていましたが、その後欧米からの支援を受け始め、ソ連が瓦解するとアメリカに頼らざるを得なくなりました。しかし、最近是中国の存在感も強くなっています。トランプ大統領がエルサレムをイスラエルの首都と宣言した直後にカイロで開催されたアラブ会議には、中国の習近平国家主席も出席しており、エルサレムを首都としたパレスチナ国家を支援するとの発言を行い、そのニュースはもちろんパレスチナにも届きました。もともと中国の存在感はパレスチナで大きいのですが、それはパレスチナ国内に流通する中国製品、そしてそれを輸入するために中国に渡るパレスチナ人の存在が大きいようにも思います。中国はパレスチナのビジネスマンを中国に招いたり、研修を行ったりしているそうで、街中で私は「メイド・イン・チャイナ」と声を頻繁にかけられる他、中国に行ったことがあると話す人に多く出会います。また中国は存在感を示すために効果的な支援を行っているとも思います。パレスチナの外務省は中国の支援によって建設されたようで、それを示すプレートや石碑が中国語とアラビア語で正面に掲げられています。ほかにも、ファタハの集会で最初にスピーチした中国大使は現地紙にコラムを投稿していたり、大使館も数年前に人員を入れ替え、すべてアラビア語を話せる中国人にし、名刺には中国名とアラビア語名を組み合わせ、例えば「陳・アフマド・金平」とするなどとても力を入

れていて、存在感を高めてきています。パレスチナで一番お金持ちだという起業家のお宅を訪ねたのですが、中国のビジネスマンと一緒に写った写真とともに、中国人からもらったという置物が飾られていました。

他にパレスチナの村落部では、サダム・フセイン元イラク大統領の写真を見かけることもありますアラブの統一、外国支配からの解放、社会主義を原則として奉じていたバース党のフセイン元大統領はイスラエルに対して強い姿勢を見せていました。その大統領がクウェートを侵攻した際、当時のアラファト議長がイラクに赴き、その侵攻を支持し、フセインと抱き合った映像が世界中に広がったということなので、パレスチナ人の中にはフセインに親近感を覚え、期待をする気持ちもあったのかもしれません。最近ではトルコのエルドアン大統領が、ガザについて頻繁に言及し、イスラエルを批判する姿勢を示し、パレスチナでも人気がありますが、ナセルしかりフセインしかりアサドしかり、パレスチナ人は自分たちだけでは難しい問題の打開に向けて、他国の指導者などに希望を見出し、打ち砕かれ、そしてまた期待し、とその心は疲弊しているように思います。「誰が正義を実行してくれるのか。それは、自分たちの政府でもない。アメリカでもない。誰に頼ればいいのか…」という気持ちでしょうか。パレスチナへのサポートを口にするものの、イスラエルと関係を強めつつある湾岸諸国に対しても、期待は小さいと思います。

パレスチナでも、海外に出られる人は、既に外にでていて、そこで生活を立てています。しかし、パレスチナ内にいる人が、脱出口を見出すのは、大変難しいことでもあります。抗議するために、デモに行ったり、銃を持つイスラエル兵に向かって石を投げたり、タイヤを燃やして道を防いだり、もしくは100%撃たれて死ぬことを前提に、イスラエル兵や入植者を刺しに向かったり。インティファダ以降は火器や武器がより手に入りにくくなったため、一般的な「武器」といえば、石か棒か、。そんな活動の中で、日々日々、主に若者たちが命を失っていきます。

抵抗に疲れ果てたせいでしょうか、政治に関心がないと言い、いい車を買ひ、ブランド品を持ち、いいレストランで食事をし、と日々の生活を楽しもうとする人々も多くいます。パレスチナ自治政府も人々が銀行でローンを組んで、車や家を買ったりすることを奨励してます。英語を学び、大学に行き、ラマッラでは特に、比較的平穏で恵まれた生活はできる、。

ラマッラに住むのは、政府関係者やビジネスマンなど、パレスチナの中でも裕福な人々です。私が特に親しくしていたのはラマッラにいる大学を出ている英語を喋れる人たちです。この人たちのバックグラウンドを聞くと、殆どがPLOやファタハ等の元戦士の子供たちです。そうしたフリーダムファイターと呼ばれた「自由の戦士」は、PLOの抵抗の歴史と共に、そしてアラファトと共にレバノンやチュニジアなど

点々としていましたので、皆海外生まれです。そして、彼らはパレスチナ自治政府の誕生とともに、その権力の座につきました。政府などの権力に対する影響力のある勢力としてアカデミックの人々が考えられると思いますが、パレスチナの特殊な成立過程の中で、結局権力に取り込まれ、取り込まれざる負えなくなったのか、反対する勢力がいなくなってしまうと言います。

昨年秋、パレスチナを訪れた時、友人がソーシャルメディアにある映像を投稿していました。デモ参加者に向けて、催涙弾が撃たれ、その場が混乱していたので、対象と場所に対して違和感は持ったものの、イスラエル兵が撃ち込んだものと思っていました。しかし、それはパレスチナ警察によるパレスチナ人によるものだったのです。

ラマッラの町中でパレスチナ人が政府に対するデモを行っていました。ガザへの電力は、ほぼイスラエルから供給されているものですが、パレスチナ自治政府が、その支払いを止めたため、ガザへの電力供給が止まったのでした。西岸地区のパレスチナ自治政府からガザのハマスに対するプレッシャーでもありました。同じパレスチナ人なのに、政治対立のために、そこに住む人々が盾にとられている。西岸にもガザから逃げてきた人、ガザに親戚がいる人が沢山います。何より、同じパレスチナ人です。人々は町に繰り出し、デモンストレーションをしたのですが、パレスチナ自治政府がイスラエルと同じようなことを市民にした。デモに対して催涙弾を打ち込んだのです。このデモに対して、パレスチナ自治政府は、事前に中止するように伝えていたそうですが、デモは実行されました。彼は、パレスチナ自治政府の内部者から今日はデモの取材に行くといわれていたそうです。つまりパレスチナ自治政府ははじめてからそういうことをする予定だったということです。

片岡： パレスチナ自治政府も分断の一翼を担っているのですね…。外からの援助も期待できず、内部では徹底的にバラバラに…。

本田： パレスチナには皆が集合できない難しさがあります。そこに希望はありません。ど



こにも逃げ道がなく、誰も助けてくれない。パレスチナの状態は、父も母もいない。誰も助けてくれないみなしご状態です。

更にイスラエルは、爆撃はしなくても夜中もずっと飛行機を旋回させたり、工作員に夜間に突然メディアを破壊させたりして、極度の緊張を強いています。更に適当な容疑で誰かを捕まえ、仲間を売らせる…。例えば、ハマスの幹部に電話をかけさせ、その位置情報をもとにポイントに爆撃して暗殺したり…。皆互いに信用できなくなる。こうして徐々にスポイルされています。

私が大学院で勉強した「国際開発」というのは、簡単にいうと、援助を通じて、人々の生活を安定させるというもので、私がパレスチナで従事していた仕事も、パレスチナの村落部などを中心として人々の最低限の生活を保障することを目的とする案件実施に関わるものでした。国際社会の援助が始まって以降、パレスチナ人の生活水準は向上しています。それと同時に、人々は車や家を買うためにローンを組み、生活の安定を重要視し、また将来のよりよい生活のために、学校に行き、大学に行き、仕事をもち、そして家族を得え、それらを守るために、この様な状況の中でも可能な限りの安定を手に入れようとしています。「国際開発」分野で働いていた者として、この状態はきっと「紛争予防」のための「成功例」を言えるのではないかと考えます。援助国は、パレスチナ人の最低限の生活を安定させるために支援を行っていますが、この目的の一つには、国が混乱に陥る前段階としての「若者の武装グループへの参加、もしくは暴力を伴う活動に身を投じる」ことを防ぐ、つまり守るべき生活もなく投げやりになって、身を捨てた行動を防ぐ、ということも含まれていると個人的には理解しています。

パレスチナ問題への国際社会の関心、もしくはパレスチナ人が国際社会と繋がろうとしているせいか、近年のパレスチナの西洋化もしくは西洋に対する憧憬の念は強まっているように思えました。その傾向は見なし首都であるラマッラで顕著である。若者は、英語、フランス語を学び、西洋的なカフェやレストランに行き、欧米の映画や



ドラマを見、ヨルダン経由で海外にも旅行します。イスラエルによる数々の制限がある中で、人々は別の出口を見つけようとし、束の間の自由を謳歌し、またこの物理的に閉ざされた場所に戻る。しかし一方、パレスチナ人は「イスラエルとパレスチナの平和構築」のための交渉人である大国アメリカが強く支援しているイスラエルと武力

（もしくは政治的にも）によって対峙した際に、如何にその結果が空しいものになるかは、身を以て知っています。

私が話した若者の中には、「政治も、イスラエルも、もうどうでもいい」という若者も少なくありませんでした。彼らは占領状態にあるパレスチナに生まれ、その状態に納得しているわけでありませんが、決定的な打開策も見つからず、どうしようがないためか、自分たちの生活や幸せに気を向けようとしているのです。

パレスチナではエンジニアリングを専攻する生徒がたくさんいますが、これは就職の機会が多いこと、そしてITなど、空間的制約がないものであれば物理的に人・物の出入りに制限のあるパレスチナの中でも道が開ける可能性があるからです。ある友人もパレスチナ最高峰の大学を出たエンジニアで自分でアプリを開発するなどしており、彼はまさに「ジーニアス」と思えるほど頭がよく、その考えからのフェアさ、そして先を見通す力に感銘を受けたのですが、彼はラワビというパレスチナのビジネスマンが新しく建設した町で、スタートアップ企業を支援し、またイスラエルや海外の企業とも協力できる体制づくりをしていました。エンジニアが集まって起業し、イスラエルのファンドを使用して事業を行っているものもいれば、イスラエル側の企業でエンジニアとして働いたり、パレスチナ内にあるイスラエル資本の会社で働いている人もいます。中にはイスラエルの会社で働いているということで、回りのパレスチナ人が非難されることもなくはないのですが、「仕事」と割り切っていたり、その仕事を通じて、問題の解決、パレスチナの発展を目指している若者もいます。所謂社会貢献を目指すイスラエル企業で、パレスチナで人を雇うことで、イスラエルとパレスチナ間の交流を行う目的があると言うところもありますが、イスラエル側の企業にとっては、同じ能力でもパレスチナ人の賃金はイスラエルで人を雇うより安く済みますし、また雇用しているイスラエル国内のパレスチナ人（アラブ系イスラエル人）のエンジニアは、パレスチナ西岸地区とイスラエルを自由に行き来できるため、パレスチナに事務所を持っていたり、そのイスラエルに居住するパレスチナ人／アラブ系イスラエル人を通して円滑に仕事をする事が出来るからだと言います。

私が拠点置いていたラマッラ周辺でも衝突は発生するのですが、アメリカ帰りのパレスチナ人女性が立ち上げたスタートアップ企業が提供するパレスチナ内の衝突・封鎖場所を知らせるレポーティングシステムのようなアプリを使ったことがあります。実際に使ってみると、四六時中ピコピコピコピコ、夜中も通知音が鳴り眠れませんでした。いったいどれだけ衝突が起こっているのか、と驚きました。

他にも電気の供給が極度に不安定なガザ地区で、一般の人たちにも手の届きやすい太陽光発電セットをつくったり、戦争後の復興のために必須のセメントの輸入が制限される中、焼却灰を使って資材ブロックを制作したりする大学を卒業して日の浅い、

女性起業家もいます。

彼女たちのように、自分の能力と経験を活かし、パレスチナで事業を立ち上げ、雇用機会を提供し、社会的にも意義ある仕事をつくり、そして現状改善に少しでも役に立ちたいと願っている若者も様々な分野で見かけることができます。

片岡： 最後に、トランプ大統領が、エルサレムの帰属と米国大使館を移転することを宣言したことについてお聞かせ下さい。

本田： 当時私はパレスチナにいたのです

が、その時のパレスチナ人の様子は、彼らのやり場のない憤りと諦めを改めて感ずる機会となりました。トランプ大統領の発言した翌朝、私は交通が止まっているのではないかと、ストライキが起こっているのではないかと、などと考えながら家を出たのですが、何事も



なく、普段通りの朝を迎え、職場に向かいました。地元の村でファタハメンバーとして活動している同僚に、この件について尋ねたところ、自嘲気味に「トランプが今エルサレムをイスラエルの首都と言おうが言うまいが、既にエルサレムにはイスラエル兵がおり、パレスチナ人の自由はきかない。自分はエルサレム県に住んでいるのにも関わらず、以前は簡単に行けたエルサレム市に行くことができない。この宣言で何が変わると言うんだ。実質的にエルサレムは既にイスラエルの手中にあるんだ」と言いました。また 20 代後半の同僚女性にも話をきいてみました。「どうなると思う？ ハマスはインティファダ呼びかけているけど」。すると彼女はため息をつきながら「うーん、怒りは感じる。でも、もうインティファダは嫌なの。インフラも壊され、ボロボロになった町を回復させないといけないのはパレスチナ人で、その回復には莫大な資金がかかる」と言いました。2000 年から 2005 年続いた第二次インティファダ。中心都市ラマッラの上空には、イスラエルのヘリコプターが飛び交い、空爆が行われ、地上では侵攻してきた戦車や兵の姿がありました。今の 20 代、30 代の若者たちは、当時 10 歳前後。その光景は今でも強く、彼女、彼らの脳裏に焼き付いています。またパレスチナの古都ナブルス出身の友人は自分も含め、パレスチナの若者の中には精神的に不安定な若者も多いと話してくれましたが、その理由として、インティファダで目にした情景や、現在もパレスチナが置かれている状態を理由として挙げていました。彼は、インティファダ中に自分と同じ年ほどの子供が街中で撃たれた情景を、見ていたそうです。すでに占領状態であったパレスチナで生まれた若者たちは、日常生活でぶち当たる様々な制限やイスラエル兵の存在により戦意を削が

れてしまっている者も多く、これまで抵抗運動を続けてきた両親や祖父母の姿、そしてそれが尽く成功していないことを知っている。本来であれば社会を変えるエネルギーを持っている若者たちですが、その言葉からは自分たちの状況に対する怒りと共に、諦めを感じてしまうことも多くあります。

気持ちをそがれて、そがれて、立ち上がってもそがれて…。心の中で、瘡蓋を剥がしまくって癒やすことが難しい傷跡を心の奥底に抱えていました。暴力を振るわれ続けた人が反抗する意欲を失うというのは、こういうことなのか、とも思いました。

トランプの発言の翌日、ラマツラ市内で大規模なデモがありました。そのデモに参加した友人はこう言いました。「自分はとても悲しい。だから、デモに行ったんだ。ただ悲しかったから。でも参加していた人はそんなに多くなかった。もしインティファダが起こったり衝突が発展すると、イスラエルがまた町に侵攻してきて、道路もインフラも、店もすべて壊される。どうなるか分かっている。そして、現状が変わらないことも。昔は自分も興味本位で、危険な衝突の場に行っていた。でも、自分の親戚も2人逮捕され、何も大きなことはしていないのに10年以上牢屋にいる。1人は今35歳。更に4年、牢屋にいなきゃいけないんだ。ほかにも衝突の現場にいた友人は撃たれ、未だに後遺症が残っている。自分の周りにはそんな人達が沢山いるんだ。何か計画したり、行動を起こすと、イスラエル兵が夜中や夜明け前に家に来て、連れていかれるだけなんだ。それで悲しむのは誰？イスラエル人じゃない、自分の母親だったり妹だったり家族なんだ。自分は家族にそんな思いをさせたくない。だから自分の身を危険に晒す可能性があることから、距離を置いているんだ」と話していました。そして一言絞り出すようにこういいました。「Kei、僕はこの地では息ができないんだ。」

片岡： 貴重なお話を有難うございました。

<完> (一部敬称略)

※ インタビューは2019年4月に行ったものです。

※ 本稿は、本田さんの体験談・個人的意見に基づいて執筆されたもので、特定の組織・団体の見解を代表するものではありません。

※ ご関心のある方へ。

本田さんは、パレスチナについて、いくつかブログ記事として書いています。

<https://kei48.wordpress.com/>

またフォーブス・ジャパンでもガザのエネルギー事情について記事を書きました。

<https://forbesjapan.com/articles/detail/21320>